柳田国男におけるオーストラリア認識

宇　田　　正

目　次

はじめに
Ⅰ　課題への接近
Ⅱ　民俗学的観点からの言及
Ⅲ　国際政治的観点からの言及
むすびにかえて

は　じ　め　に

日本民俗学の創始者として，生前はその精力的な研究・教育・調査活動，没後もなお遺された尨大なその著作を通じて，現代日本人の思想・文化やわが国の人文科学・社会科学にわたる幅ひろい学問分野に大きな影響を与えつつある柳田国男（明治8〔1875〕年～昭和37〔1962〕年）の認識体系において，オーストラリアはどのように位置づけられているであろうか．

筆者のこの問題関心については，いますこし説明を必要としよう．北半球の一角の狭小な国土に存立する近代日本人の対外認識においては，ひとしく南半球に位置するとはいえ，距離的にははるかに遠い「地球の裏側」にあたる南アメリカと対比して，「赤道の対岸」として相対的に「近接」（東京とアデレイドはどちらも東経140度付近に位置）しているオーストラリアが，むしろ「疎遠」であったことは否定できない．

それというのも，明治維新以後，先進欧米にならい，急速な近代産業国家としての発展を志向し工業化政策を推進してきた日本人には，ひさしい間オーストラリアまたは濠洲といえば衣服原材料たる羊毛の豊富な供給国としての「牧場」的イメージしか思い浮かばなかったからでもあろう．また，それ以上に，他面において，南アメリカとくにブラジル等とくらべて，オーストラリアには独自な移民政策の障壁があったため，両国間労働力移動の断絶という事情がそのような「疎遠」関係をいっそううながしたともいえる．

そして，皮肉にも，オーストラリアの政治・社会・歴史・文化等への多面的な関心が，一般啓蒙書ないし学術的文献の出版ブームという形で一時的ながら高まりを示したのは，太平洋戦

争に際しオーストラリアが交戦国となったことから「敵」を知る必要に迫られてのことであったが，これには多分に戦争を契機とする「上から」の「文化工作」的なもの，ないしは時局便乗出版物が多く，その情報内容にも誇張や歪曲が見られたりして，日本人一般のオーストラリア認識を正しい意味において広げ深めるというものばかりではなかったし，何よりも大方の一般国民は戦時下の生活に追われ，遠い敵国オーストラリアに真面目な関心をはらう心身の余裕がなかったのである．

しかも，戦後におけるわが国の高度な経済発展の構造のなかで，オーストラリアはあらたに食糧農畜産品，鉱工業原材料供給国としてわが国経済に大きな影響を及ぼすに至っており，それにともない近年はわが国産業界においてオーストラリアへの関心が持続的に高まりつつあるのは事実である．しかしながら，それはかならずしも一般国民レベルの関心にまでは拡がっていないと思われるし，かりに一般的関心のあらたな拡がりが見られるとしても，それはかつての「牧場」的イメージから「食糧庫」ないしは「鉱山」的イメージに塗りかえられた程度の，皮相的なものでしかないのではあるまいか．

いずれにせよ，第三世界を軸に国際的秩序が再編成されつつあるこんにち，わが国とオーストラリアとの政治的，経済的関係も着実に深まりつつある現実によりよく正しく対処していくために，やはり両国間の真の相互理解の確立に向かってすこしでも前進する努力を，われわれはわれわれなりに重ねていかねばなるまい．そのための足がかりとして，近代日本人のオーストラリア認識の原点を再確認することは，それなりに有意義な作業であると言ってよかろう．

こうした問題意識から作業に着手するに当たり，筆者は，近代日本社会の指導者クラスに属し，国民の思想にも大きな影響を与えながらも，オーストラリア問題については公私とも特別の関係からの制約をうけないがゆえにそのオーストラリア認識にはより一般性があると考えられる人物の一人として，柳田国男をとり上げようとするものである．

柳田国男は，明治後期から大正中期に至る前半生を，農商務省農務局事務官，内閣法制局参事官，宮内省書記官（兼任），貴族院書記官長と，国家官僚としての枢要なポストを歴任栄進，さらに欧洲大戦後は国際聯盟委任統治委員会委員として国際政治の一端にも関与，大正後期から昭和前期にかけて朝日新聞論説委員，以後の半生はもっぱら在野の学徒として民俗学の調査研究にたずさわり多くの独創的な業績を挙げた．なお戦後の一時期，枢密顧問官にも就任した．このように社会の指導的立場に在って種々多方面な経歴をもつ人物であり，その博い知識と深い学殖とは，近代日本社会の知性的・思想的な面を代表する人物としてサンプリングしてよいと思われる．なお柳田国男にはオーストラリアに関する著述は一点もないが，その書きのこした諸文章の中にはオーストラリアに関する記述や字句がいくつか目に触れるところから，それらを柳田国男のオーストラリア認識の露頭としてとらえ，それらの奥にひろがる柳田自身の——そして同時に近代日本人のオーストラリアのイメージを再確認するための素材を提出す

るというのが，本稿の目的とするところにほかならない．

I　課題への接近

さて，柳田国男その人は，オーストラリアという大陸国家に関してどのような認識を有していたであろうか．先にも述べたように，柳田には例えば「濠洲論」というような題目のまとまった記述がない以上，さしあたりのこされた唯一の接近方法は，その全著作を通して随所に散見するオーストラリア関係の部分的・断片的な記述を採り上げ，寄せ集めるしかないのである．とはいえ，柳田の尨大な著作のヴォリュームを考えるとそれは大変な作業のように感じられるが，幸にして，全35巻にのぼる「定本柳田国男集」（昭和37年〜39年刊行，筑摩書房）には別巻第5として「総索引」が添えられているので，その中からオーストラリア関係項目をひろい出し，それぞれ本文の記述をさぐり出し検討を加えることは比較的容易である．

この方法で，筆者がまずひろい出した関係項目と，その本文記載巻数およびページは，次のとおりである．ただし，この「総索引」には僅かながら遺漏があり，筆者の気のついた範囲で訂補したことをことわっておく．

〈項　目〉	〈本文所出（巻）	ページ〉
オーストラリヤ	(25)	p.　96
オウストラリヤ	(29)	p. 133
濠洲	(3)	p. 267
	(5)	p. 503
	(7)	p. 155
	(14)	p. 217
	(16)	p. 210
	(25)	p.　94（2ケ所）
		p.　95
		p.　98
	(29)	p. 124
		p. 129
		p. 132
		p. 488
濠洲大陸	(25)	p. 236
濠洲土人	(25)	p. 243
濠洲黒人	(25)	p. 255

濠洲の黒人	(7)	p. 173
濠洲旅行記	(25)	p. 236
シドニイ	(3)	p. 63
	(25)	p. 105
大洋洲	(6)	p. 360
タスマニア島	(29)	p. 124
タスマニヤ島の土人	(25)	p. 98
ニウジーランド	(12)	p. 461
	(25)	p. 94（2ケ所）
	(28)	p. 375
	(29)	p. 129
白濠洲主義	(25)	p. 96
	(29)	p. 488
白色濠洲主義	(29)	p. 118
		p. 133
白色濠洲の主義	(29)	p. 134
メルボルン	(25)	p. 105
羊毛	(24)	p. 148

＊（地名）キャンベラ，アデレイド，ブリスベイン，パース，ポートダーウィン，（人名）キャプテン・クック，兼松房治郎，（動物名）カンガルー，コアラ熊，の各語句については，「総索引」中に項目として記載がなかった．念のため付記しておく．

Ⅱ　民俗学的観点からの言及

柳田国男は周知のように日本人の心的・物的生活文化の構造と展開の論理を解明すべく独自な学問的方法論をもって精力的な調査・研究活動をかさね大きな成果を挙げ，日本民俗学の体系を樹立した．柳田みずからそれをナショナルな学問とし一国民俗学と規定しており，のちに「新国学」と称したのもその一表明である．しかし，柳田によるその学問的形成は，そうしたナショナルな問題意識に支えられつつも，同時にそれは前世紀中葉から帝国主義段階に入った全世界の新秩序のなかで西欧先進資本主義国家の側から高まってきたインターナショナルな学問的動向の一環とみることができよう．

すなわちそれは，フランスやイギリスなどの植民地宗主国において近代植民地経営という政治上の必要に迫られて成立，発達してきたいわゆる民族学の潮流が，大和島根の岸辺に達した

ものにほかならなかった．大正15（1926）年5月，柳田は「Ethnology とは何か」という題目で文話会において講演をおこない，その開口劈頭に「只今我々少数の者の携はって居るエスノロジー……とは全体どんな学問であるか．之を二三の辞書類に依って，知ることが既に容易で無い．現に自分などは学校で講釈をするのに，今尚訳語の決定に苦しんで居る．民俗学と訳して見たいのであるが，困るのは『民族』という語と響が紛はしいのみならず，別に民族学と謂ふ方がよいといふ者もあるので，俄かにさうきめるわけに行かぬ．」[1]（傍点引用者）と述べている．いかにも，ひとつの学問の開拓・播種に身を挺する先覚者の労苦がうかがえるのであるが，このように学問的後進国の学徒・研究者を戸惑わせ悩ませるというのも，この学問の呼称からして国によって異なり，同じ呼称の学問がかならずしも同一領域の学問内容を備えていないという複雑な事情に由来するのである．

柳田は，この講演において，この学問が近代国家の植民地行政に資すべき研究・調査という政治的要請をその成立契機としながらも，その学問内容と呼称とが英・仏の二大学派の間で食いちがっていたのが，ようやくこの半世紀の間に「社会科学の大切な一科目」として「全世界的ともいふべき気運」を迎えたと述べる[2]．しかも Ethnology は「行く〳〵次第に National 国民的になるべきもの[3]」とし，「此学問は実は蛮夷を知るために起ったもの[4]」であるが，すくなくとも日本人にとっては今やみずからの民族の内省の学問ともいうべきあらたな役割を帯びつつあるという認識に立って日本民俗学への展望を提示したのである．

この時代の柳田は，上記以外にも国内各地において精力的に講演し，いわゆる民族学の学問先進諸国における発達の現状にしばしば触れている．それらの講演記録のうちからとくに濠洲に関連ある項目を含むパラグラフを採り上げてみることにする．

(1)　……第一には太平洋研究の学問が，著しく進んだことである．（略）太平洋研究の学問としての面白味は，一言で言ふならば何でもかでも，欧羅巴と夏冬の相違の通りに裏がえしであることである．それも遠方から見て居るだけでは，十分の調査もしにくいのであるが，一方には**濠洲ニウジーランドの土着した移民の子孫**が，時を経て漸く文化の価値を知り，教育や研究の方にも次第に国らしくなって来た結果，彼等の大学にも段々独立してよい学者を出すやうになったので，今ではもう北半球の他国の人にばかり，太平洋の学問を委ねては置かれなくなったのである．

併し将来の此方面の学問に対しては，何と言っても北米合衆国の力は大に働くことだらうと思ふ．（大正14年5月，長野県東筑摩郡教育会における「青年と学問」と題する講演[5]）

1)　『定本柳田国男集：第25巻』p. 232.
2)　同上，pp. 236-237.
3)　同上，p. 244.
4)　同上.
5)　同上，p. 94.

(2) ……白人の物ずき筆まめは，大体に於て学問上有益であった．殊に此世紀に入ってから彼等の調査方法は急激に改良せられた．（略） 英国人の仕事は比較的知られて居るが，是も勿論他の諸国に劣らず……支那に関する資料なども，一番纏まったものは皆英人の手に成った．殊にニウギニヤ以東の南太平洋諸島に至っては，今では殆とアングロサクソンの独擅場であった．英本国人の手の届かぬ部分は，ポリネシヤ学会や**シドニイ，メルボルンの大学**の先生たちが之に着手して居る．（同上講演[1]）

(3) しかも今日は既に世界諸民族に関する所謂土俗誌の類が，真偽雑然として篤学者の書架に充溢する世となって居る．異聞採集の旅行に次いで，準備の整った学術探険隊の発遣は比々として企画せられ，年毎に打寄せらるゝ報告書類の大波は，いとゞ学海の茫洋として無際なることを感ぜしめた．単なる智識の整理から進んで，更に系統立った積極的論証に，入込むべき時代になったのである．比較研究の興味は大に起らざるを得ない．乃ち過去の完成を以て目せられた希臘の文化にも，はた埃及古帝国の燦爛たる展開にも，必ずその背後には一つづつの蒙昧時代があって，其状態は北欧諸国の原始宗教の社会，乃至は蠢爾として愚なる**濠洲黒人**や，ヴェッダやネグリトの今日の文明と，同じ卓子の上に並べて見なければ，互ひに真の意味の解らないものであることが明かになったのである．所謂文化の偶発多源論と一源移動説とは，新たに此資料に拠って其正否を判定せらるべき世の中になったのである．学問が鎖国の小さな太平の中に於て，徒らに眷属知友の賞賛に陶酔して居られなくなったのは，厄介かも知れぬが亦一つの進歩である．（大正15年４月，日本社会学会における「日本の民俗学」と題する講演[2]）

(4) 斯ういふ事業（引用者註―ジェィムズ・フレイザー卿が『金枝篇』を完成した例のように，理想的な人的・物的条件をそなえて，行届いた研究調査を進めること．）は英国の如き学問国でも，五十年前には出来なかったことである．というわけは前世紀の央ば過ぎまでは，学問の為に特に企てられた調査旅行は，殆と一つも無かったと謂ってよいからである．（略）

ところが約五十年の此方になって，漸く真面目なる学術探険の旅行が，十分の用意を以て企てられるやうになった．就中巨大なる植民者として，他国に負けてはならぬといふ義務心又は自重心が，最も多く英帝国の世論を刺戟した．さうして永遠の事業の色々と企てられた中で，殊に代表的なる労作は Spencer と Gillen と，二人の旅人の**濠洲旅行記の三部作**である．斯んな周到なる又精確なる視察録は，今後も恐らくはさう沢山は出来まい．少なくとも個人の力では到底再びこんな難旅行を**濠洲大陸**に企てられず，又必ずしも改めて之を繰返すにも及ばぬと思う程，完全なる報告であった．（略）（前出講演「Ethnology とは何か」[3]）

1) 『定本柳田国男集：第25巻』p. 105.
2) 同上，pp. 254-255.
3) 同上，pp. 235-236.

(5)　(略)……どこの国でも此学問には入門とか階梯とかいふ本が少なくて，其癖各人の研究が微に入り細を穿ち，どんな論文が出て居るかを知るだけですら容易で無い．(略)……どんな超人的博覧強記でも，尚受売さへ碌々は出来ぬ位に，今日はもう著述報告が多くなったのである．そこで自然に生じたる分業は，大体此頃では地域的にならうとして居る．例へば米国でいへば印甸人に関しては大抵のことは知って居る．その他は大勢に注意して居て，入用なときに調べるだけにとめて置く．太平洋でもポリネシヤの学者とか，又は**濠洲土人**の事だけ，パプア人の問題のみに心を潜めるといふ風になるのは，止むことを得ざる趨勢である．(同上講演[1])

次に，柳田が外国文献等を博捜，触目聞知し得たとおぼしき各国民族誌的記述のうちとくに濠洲に関係する項目を含むパラグラフをすべて摘出してみよう．とくに，これらの文章を引用した文献はすべて柳田の日本民俗学に関する著述，論考であることに注意したい．すなわち，柳田の日本民俗学の方法論には比較研究的視角が確固としてつらぬかれており，また彼の学殖の深さがそれを実質的に支えたという事である．

(6)　(略)……フレェザー教授のトテミズム・エンド・エキゾガミイの中に，スペンサア及びジレンの名著を引いて，**濠洲の或蛮族**には今尚妊娠分娩の原因が男女の交会に在ることを知らぬ者があり，各部落には一定の霊地があって死者の魂魄は悉く此地に集合し居り，通行の婦人を見掛けて其胎内に宿ると子が出来ると信じて居る．故に若い女の母となることを欲せざる者其地を通行する際には，わざと腰を屈め皺嗄声を作って，自分の到底子を産む能力無き者であることを装いて魂魄を欺く云々と記してある……．(略)(「夜啼石の話」，大正4年1月刊「日本及日本人」645号所収[2])

(7)　丸で時代のちがった二つの笑の種が，現在は日本に跋扈して居る．その一つは男女の私ごとや所謂下がった話，これは至って原始的なもので，錫蘭の山に居るヴェッダとか，**濠洲の砂漠に住む土人**とかでも，こんな話をして聴かせれば必ず笑ふ．今一つのものは最も新しい変化した形，所謂駄ジャレ・口合ひの類の，抱いほど却って笑ひたくなる滑稽である．(略)(「笑の文学の起源」昭和3年9月，「中央公論」43巻9号所収[3])

(8)　未開人の笑を研究しようとした人の中に，洪牙利の学者ゲザ・ロハイムがある．彼の説に依れば**濠洲の黒人**などは，独り力闘の勝利を得た場合のみならず，色慾食慾の満足，それから下体の張切って居るものを，排泄し得た場合にも笑ふとある．さうして彼等の神霊も亦之と同様なる状態に於て，快げに大いに笑ふものと信じて居るとある．斯ういふ下卑たる笑を笑った場合が，かつて一度は我々にもあったわけである．(略)(同上[4])

1)　『定本柳田国男集：第25巻』p. 243.
2)　『定本柳田国男集：第5巻』p. 503.
3)　『定本柳田国男集：第7巻』p. 155.
4)　同上.

(9)　神木に手を着くるものは最も重き罪人　此思想は必ずしも日本特有のものではなくして，殆と世界の隅々，殊に東方の諸島には広く行はれて居る思想である．**ニュージーランド**の民族などを英国人の詳説した書物を見ると，彼の島などでは，之を「タブー」といって居って，伝承の結果，酋長などにも，物を「タブー」するの権力が備って居るが，其始めに於ては「タブー」は神意である．「タブー」せられた場所，又は樹林に聊かにても手を着ける行があれば，其人間は国民の罪人であり，社会の罪人であって，如何なる刑罰も之を償ふに足らぬものとしてある．（略）（「塚と森の話」，明治45年1～5月「斯民」6巻10～12号及び7巻1，2号所収[1]）

(10)　……酒ほど大きな災ひはせぬかも知らぬが，女の紅白粉などもやはり酒と同様に，本来は祭とか式典とか，大よそ酒の用ゐられなければならぬ様な日に，女を常の女でなくする為に施したのが化粧であった．亜弗利加の内陸や**濠洲の蛮地**に行くと今でも是に面を被るのと同じやうな効果を認めて居る．（「女性と歴史」昭和11年3月，「民間伝承」所収[2]）

次に掲げる一節は，日本民俗学の研究・調査に従事しようとする後進の人々に，本邦民間の口碑伝承・口承文芸を採集するに際しての心得を説く伏線として，大洋洲などに於ける白人調査者の体験を紹介したものである．

(11)　（略）部外他種族の説話の採集，殊に白人が阿弗利加や**大洋洲**に於て試みたものなどは，理解の能力が到底かゝる形式の辞句に及ばぬのみならず，話者も最初から通弁の望み無きことを知って，さしも彼等に取っては肝要の部分を，いゝ加減に端折って筋を運ばせた場合も多かったのは致し方が無いだらうが，言語感覚を共通にして居る我々までが，此流儀に倣うて記録を省略し，折角僅かでも遺り伝はって居るものを，抛り出してしまふことは損失である．（略）（「昔話採集者の為に」昭和6年4月「旅と伝説」4巻4号所収[3]）

あえて日本人に限らずとも，オーストラリアと云えば誰しも牧羊の国，羊毛の国というイメージを浮かべるのが歴史上には世界一般的であることから，羊毛・牧羊という項目を含む文章を以下に掲げてみた．これは，国民的衣服生産のための近代工業化の体験が象徴する日本民族の意識と行動のパターンをするどく，かつ巧みに指摘したもので，この原料の羊毛はまぎれもなくオーストラリア産のものである．もちろん，文章の力点は，わが国羊毛加工工業の急激な発展がもたらした近代衣服文化をその基本的な一面とするわが国の明治・大正期の世相の解剖に置かれている．すなわちこれが柳田における日本民族とその社会・文化への「民俗学」的接近にほかならなかった．

(12)　モスリン工業の急速なる発達の跡は，その一種の中間性に於て，人力車などの経過と共

1)　『定本柳田国男集：第12巻』pp. 461-462.
2)　『定本柳田国男集：第14巻』pp. 216-217.
3)　『定本柳田国男集：第6巻』pp. 360-361.

通した点が多い．尤も此方は最初は模倣であったが，即座に我々は之を日本向きと化し，後には又他で見られない特産として認めさせた．さうして是がどの程度までに，国の生活の実際と調和し得るかを，遅くなってから発見したことも同じである．**原料の羊毛**が果して国内の生産を期し得るかどうか，それを何れとも決し得ないまゝで，著手したことは無謀のやうであるが，そんな事には構って居られないといふ事のみは，既に木綿の方でも経験して居る．（略）少なくとも我々は之に由って，又新しい経験を積み添へた．一言でいふならば獣毛も着らるゝこと，古来一疋でも**羊**を飼った覚えの無い百姓でも，其毛を取り寄せて織らせて着ることの出来る世の中に，もうなって居るといふ意識である．（『明治大正史・世相篇』昭和6年1月，朝日新聞社刊『明治大正史』シリーズ第4巻）[1]

Ⅲ　国際政治的観点からの言及

柳田国男の思想体系や学問的業績ないしはそれらの背景となる彼の心的風土をめぐって，わが国では近年とみに一般的関心が高まりつつあり，従来の教養エリート的読者層を包摂する知的レジャー志向の大衆的スケールにおいていわゆる柳田国男ブーム的状況がつづいている．それの原因ないし結果として，柳田自身の著作類はもとより，柳田民俗学ないし柳田の伝記・人物に関する研究文献や評論・エッセイあるいは参考資料のたぐい，ひいては文庫・新書・ムック等出版形式の大衆化により一般向けの紹介＝入門書・図録等，出版される点数，冊数もおびただしい．

しかしながら，そうした出版資本やマス・コミュニケイションの作り上げる柳田国男のイメージは，どうしてもより一般向けの「日本民俗学の父」「遠野物語の世界の紹介者」とでもいうような一定の鋳型にはめられていて，それが強調される結果，柳田のいわば前半生ともいうべき部分が見過されているきらいがある．

柳田国男が，佐々木喜善を通して遠野地方の伝承に触れ，また「後狩詞記」の資料採訪の旅に出るなど，民俗学に関心を注ぎはじめたのは明治35（1908）年であり，やがて大正2（1913）年，月刊雑誌「郷土研究」の創刊を契機に民俗学への取組みは本格的になっていくのであるが，それ以前の柳田は農商務省の若手エリート官僚として農政の実務にたずさわり，産業組合運動を推進して全国農村をまわり，一方早稲田大学，専修大学等で農業政策学を講義するなど，わが国農政の中堅リーダーとしての活動を10年余続けていたのである．当時の柳田の大学における農業政策学の講義の一斑を，次に掲げておこう．

(13)　……次ニ注意スヘキハ雑草ニ因ル地力ノ損失ナリ　此損害ハ害虫ノ如ク急ナラサルモ結

1)　『定本柳田国男集：第24巻』p. 148.

果ニ於テハ相択フ所ナシ又其種類ノ絶滅ヲ計ルニハ個人ノ力ハ不能ナリ従テ国ノ政策ノ活動スル必要アルナリ雑草条例ヲ布クノ例ハ**ニウジーランド**等ニ在リ思フニ此種警察的ノ法令ノ他更ニ原野改良ノ事業ト共ニ積極的ノ施設ヲ必要トスルナラン農法ノ進歩セル平野地方ニ於テハ害虫，害草ノ駆除予防ノ外最早生産政策ヲ施スヘキ余地ナキモノ我国ニハ少ナカラス．
（「農業政策学」明治35，36年度専修大学講義録として執筆[1]）

こうして農政の中堅リーダーないしは農政学徒として使命感に燃える若き柳田国男の眼前に，はてしなく展開するものは，彼の理想像とはうらはらに，後発的な日本資本主義の拠って立つ寄生地主制の桎梏の下に中型自営農民層の経済的自立基盤が掘りくずされ，また中央大資本の圧迫の下に農村の工業化が阻止されつつ，資本主義的発展の根を断ち切られ，疲弊していく現実の農村の姿であった．

柳田国男にとって，日本社会の近代化の理念型はやはり国民の大部分を占める農民階層の，中産自営農としての経済的主体性の確立を基軸とするものでなければならなかった．国内政治秩序の確立も国民文化の向上も国民経済の発展も国際的地位の強化も，すべてそれを土台にて実現されるべきものであった．こうした理念と現実との大きなギャップに直面して，柳田は日本の近代化に疑問を呈するに至ったのである．そのことが，近代化の皮相的なメリットに良心を麻痺させ状況に流されていく日本人同胞にたいし，民族的覚醒をよびかける内省の学として日本民俗学への柳田自身の挺身となったのである．

自らの理想実現の最良の方便として勤めた官途であったが，現実の政治機構の中での一個の官僚の力の限界を知った柳田国男は，すでに踏込んでいる民俗学研究活動と国家公務との板ばさみとなり，大正8（1919）年ついに貴族院書記官長の栄職を捨て，野に下る．翌9（1920）年，比較的自由な行動・発言を許されることから朝日新聞客員となり，後年の日本民俗学関係の幾多の業績に結実する各地の民俗資料を博捜して自由に全国を旅行できる境遇となった．

たまたま，その翌10（1921）年，国際聯盟事務次長で農政学の先輩新渡戸稲造の推挙により国際聯盟委任統治委員会委員に就任し，足かけ三年スイスのジュネーブに於て，はからずも国際政治の一端に関与することになるのである．というのは，第一次世界大戦の戦後処理の一環として旧ドイツ帝国領の南洋群島がわが国の委任統治下に入ったのにともない，わが国も国際聯盟からの受託国として委任統治委員会のメンバーとなり委員を選任して派遣せねばならず，その白羽の矢が柳田国男に当たったということである．柳田自身としては委員就任の交渉をうけて「太平洋の旧独領のことだけは，ごくおおまかな概念ぐらいる持っていたが，アフリカの諸植民地ときては地名もろくに知らない」のに，「西洋も見たかったのと，仕事が新しくて珍しかったのと，父も朝日社（ママ）長もともどもに勧められたのとで，ついその気になっ」て赴任した．

1）『定本柳田国男集：第28巻』p. 375.

「何しろ新しい任務がすぐに始まるのだから骨が折れた」し，日常生活に欠かせない外国語とくに会話のハンディキャップに苦労しながらも，だんだん委員会の仕事にも慣れてくると，各国から出席している委員仲間の人物観察をする余裕もできて来た．「この委員会には出なければならぬはずのフランスの委員は，三年とも顔を出さなかった．……フランスの委員の来ずに，しまったことは，何か政治上の理由があったにちがいない．（略）……事情が甲乙丙の委任領ごとにあまりにも違い過ぎて一貫したものがないので，よその施設については冷淡になりやすくまたあらさがしに傾きやすく，一方自国の問題においては，あまりにほかの人の知らないのがもどかしく，つい説明役にも弁護役にもなることがあって，いやな気持ちを仲間の人にもたせる．（略）しかし結局は委任統治という組織が，妙な理窟倒れの人工的なものなので，こういう結果にもなるのだ，と思わずにはいられなかった．」（「ジュネーブの思い出――初期の委任統治委員会」[1]）次に掲げるのは柳田の当時の日記の一節であり，文中，オーストラリアの代表者と委員との間に大論争があったという記述も，柳田自身の前掲の回想記に分析されている当時の委任統治委員会の雰囲気を前提として，首肯されるものといえよう．

⑭　八月七日（註．大正11年）　月よう　けふは九時半より会議．吉岡女史の室にて金井君に逢ふ．ベルグホテルにて，委員一同よりラッパール夫妻を午餐に招く．里昂の山田君に逢ひ，共に労働の事務局に行く．那須君の兄さんといふ人に逢ふ．四時半より又会議．五時より公開の委員会ありて，**濠洲の代表者と委員との間に大論戦**あり．うちから手紙，又雑誌も来る．月よし．蝙蝠しきりに飛ぶ．（「瑞西日記」大正11年～12年，スイス国ジュネーブ国際聯盟委任統治委員会勤務中のもの[2]）

上記文中のラッパールとは委任統治委員会の書記長で「国際法か何かの少壮教授で，個人的野心も強い人だったが」，彼は彼なりに委員会の判定を権威あるものとするために画策努力していたのに「自分の不勉強，それも主として表現の困難のため」協力できなかったことを前出「思い出」のなかで柳田は自責している．そうした内々の事情ないし柳田の心情を知った上で見ると，上記文中のラッパール夫妻へのもてなしの記述も格別な意味を帯びてくる．

さあれ，この国際政治の舞台での「二年間の経験で私に役に立ったのは，島というものの文化史上の意義が，本には書いた人があっても，まだ常人の常識にはなりきっていないことを，しみじみと心づいた点であった．」（前出「思い出」）その大部分が，本土の属島なり植民地か委任統治領とされている現代世界における島嶼というものを足がかりにして，こののち柳田国男がいっそう深く民俗学の領域に分け入ることになるのは，必然であったといえよう．

いうまでもなく，柳田自身の学問的志向の究極の目標は，近代化の中の日本人の自己内省としての日本民俗学の構築であった．彼の学問の発想の契機は，明治以後の急激な「上から」の

1)　『定本柳田国男集：第3巻』
2)　同上，p. 267.

経済近代化の過程で日本人の原郷たるべき農村がむざんに疲弊，変質していくことへの危機感にほかならなかった．しかも，柳田は，ゆくりなくも日本の地を遠くへだてた足かけ三年間の国際政治の舞台での体験から，現代世界における島嶼の一般的なあり方が日本近代における地方農村のあり方と似通っていることをするどく認識したのではないだろうか．すなわち，世界中の大半の島嶼が帝国主義的膨膨政策の下で欧米列強の植民地になっていると同様に，わが国内の地方農村も中央大資本主導の経済近代化政策の下で国内植民地ともいうべき位置づけしか与えられていないという認識――ここから，柳田国男は，インタナショナルな問題状況を通してナショナルな課題に取組むという姿勢をとり，国際政治の中における島嶼の命運，そして植民政策，海外移民問題へと彼の目はよりいっそう大きく開かれていったと考えられる．

経済の近代化のうねりが農村社会の動揺をひきおこし，その結果労働人口が流出して都市商工業や海外植民事業へと移動し，近代資本主義の本格的な発達がはじまる反面，農村の荒廃を余儀なくされたヨーロッパ諸国とくにイギリスの歴史的体験を，柳田は次のように述べている．そして社会経済史的な条件が異なることを考慮に入れつつも，そこから何かわが国の抱える農村社会の苦悩にたいして有効な施策の手がかりをさぐろうとするかのようである．

(15)　(略)……近世の初頭，……欧羅巴の諸国に一時多くの荒村の出来たことだけは事実である．それは新時代の交通変化の一般的効果であって，殊に海運に力を入れた英国の村々が，最も烈しく荒れたのである．農村の生業が引合はなくなった為に，さうして外に幾らも良い処のあることが明らかになった故に，村が再び野になってしまふ迄，青年が去って又去ったのである．此国人口分布の実状即ち日本などゝ違って都市ばかり異状不均衡に膨脹する状態は，あの時のまゝ元へは戻らなかった．併し其為に，海外に於ける英国人の事業は繁栄した．米国もカナダも**濠洲**も出来た．海軍勢力の保持とか輸出貿易の尊重とか，特殊の政策が是が為に必要になったことは事実だが（略）国人は今に於てさして後悔しては居ないのである．
(「日本農民史（早稲田大学政治経済科講義録第49回）」大正15年4月[1])

西欧諸国が近代国家としての統一と独立とをうらづける国富の充実をはかって重商主義政策を掲げてこのかた，競って海外領土の拡張が進められ近代植民地開発・経営が展開されていく．全世界の植民地は，その後戦争のたびに拡大，再分割がかさねられ，帝国主義段階に入って以後，西欧列強は本国に数倍ないし数十倍する面積の海外植民地を擁し，その開発・経営は国政の上に大きな比重を占めるに至った．しかしながら，西欧列強による植民地経営は，労働力供給という面で深刻な隘路に直面したのである．

たとえばオーストラリアは，歴史的にはイギリスの植民地として開発されたが，此処とてもイギリス本国からの白人労働力の移動について“invisible hand”に期待できる土地柄ではな

1)　『定本柳田国男集：第16巻』pp. 209-210.

かった．そのため，いわゆる流刑囚制度により囚人労働力を投入したが，そうした状況の下では，現地の原住民を補助的開発労働力として徴発，使役する場合にもそうであろうが，それがいろいろな事情でできない場合には，原住民を邪魔者として排除する場合，白人植民者たちの手段がきわめて非人道的であったであろうことは想像に難くないのである．

(16) 熱帯地方に於ては，白人の住着きにくい事情が殊に多い．北欧羅巴の温度と，夏の乾燥に馴れた者は，南の島々の湿気と蒸暑さには我々の想像以上に苦しむのである．（略）或は母国が強制を以って白人を移住させた島がある．**濠洲の東北の一角，南端のタスマニア島**其他には，英国は囚徒を送って之の開発をさせた．（略）（「国際労働問題の一面」大正13年10月，東京朝日新聞[1]）

(17) （略）**濠洲の南に在るタスマニヤ島の土人**が，世話の不足から到頭今より五十年ほど前に死に絶えてしまったことを，学者も宗教家も今以て深く歎いて居る．（略）（前出「青年と学問[2]」）

オーストラリアの開発に当っての原住民労働力の果たした役割と，それに反対給付された不当な取扱いについては，アーネスト・スコットの次の一文が言いつくしていよう．「濠洲の迅速にして素晴らしい発展には，白色人種の渡来以前に住んでゐた原住民が組織ある好戦的な種族でなかったという事実が与って力がある．（略）白人の移住した地域における原住民は次の三つの主な原因のために頗る急速に没落して行った．即ち殺戮による現実の死亡によるもの，白人の齎した病毒及び酒によるもの，狩猟地が制限されたことから生じた生活の変化に基く死亡である．（略）原住民を滅亡せしめた最も著しい原因は，白人植民者とその雇人たる囚人の極度の蛮行と陰険な殺戮である．（略）白人の人口が増加してゆく地方で原住民が次第に滅亡して行くのは恐らく免れ難いことであったであらう．」「濠洲へ植民した初期に有能な観察者によって彼等の種族組織が研究されなかったといふことは返す返すも残念なことである．[3]」

こうした原住民族にたいする白人植民者の非人道的な処遇にはいろいろな態様があったが，つまるところ，諸悪の根源は，西北ヨーロッパ出身の白人にとって熱帯植民地での労働は生理的に不適応である一方，本国からの植民地開発の経済的要求は強まるばかりであったという点にあり，その原住民への「しわ寄せ」はエスカレートして行った．そして，より進んだ植民地経営に役立てるために原住民族の社会・文化等を理解，尊重するだけの調査・研究の余裕もなかったのである．

近代の植民地経営の展開過程に一般的な，そうした「悪」にたいして，柳田国男はそれをただ人道的な見地に立って告発しようとしたのではなかった．柳田は，この現代的な「悪」を揚

1) 『定本柳田国男集：第29巻』pp. 123-124.
2) 『定本柳田国男集：第25巻』p. 98.
3) アーネスト・スコット，濠亜調査所訳『濠洲史』（昭和19年10月，霞ケ関書房刊）pp. 175-176.

棄する現実的な方策を国際労働力移動という次元でクールに考え，その問題を国際政治の論理の中で取り扱おうとしたようである．

(18) 白人植民家の何よりも煙たがるものは，前には土人を愛する宣教師あり，近年には米国から遣って来る新聞記者があった．斯ういふ人たちの紀行や報告が世に出ぬやうだったら，太平洋住民の幸福は，或は永遠に改良する見込は無かったかも知れず，資本主義の盲目的な活動は，何をしたか分ったもので無いのだが，出しゃばりの正直者なる米合衆国が，幸ひにして太平洋上に於ては大した植民国では無かった御蔭に，社会は早くから此問題に留意し又警戒することが出来たのである．植民国自身の永年の経験，之に対する外国の公平な批評を参酌して，現在多くの研究者の抱いて居る見解を概括して見れば，要するに白人は到底熱帯諸島の植民には向かなかった．来て住むことは出来ても来て働くことは出来ない人民であった．**白濠洲主義**などと称へて，あれ程我々に惜んで居る**オーストラリヤ**でも，現にその北部の三分の一だけは，支那人を頼んでやっと少しづつ開いて居る状態である．其他の多くの島々でも，官吏か会社員かのしかも年若く屈強なる者が一時的に在勤するの外，永く住み着かうといふ白人は殆と無い．半分西洋化した合の子か，早く渡航した印度人馬来人支那人などの子孫だけが，今では真剣に土地に根をはやさうとして居るのである．尤も還るに家なき堕落した白人の，うろ〳〵して居る者は少しあるが，是は無恥無慚の死んだ方がよいやうな奴ばかりで，白人に取っては寧ろ心細い生存である．

しかも一方には斯んな白人の支配の下に，土人の衰亡は月に日に甚だしいのである．（略）（前出「青年と学問」[1]）

(19) （略）今や黒人を奴隷として売買することは恕すべからざる非人道と認めらるゝに至ったが，猶其地元に行って彼等を強ひて働かしめることは，結局の恩恵と見て居るのである．少くとも土人側の論理には合はない矛盾であった．

併し白人側の論理は又別であった．**濠洲やニゥジーランドの如き温帯の植民地**ならば兎に角，今のこの八釜しい白人の労働者をつれて往って，熱帯の植民地で働かせることは，とても今後は出来ることで無い．又到底真面目な労働者は行かない．而も概して土地広漠たる属領で，農業の如き天然相手の生産には，機械を適用し得られぬ場合が多い．土人を働かせる他は無いぢゃ無いか．折角天恵は豊かでも労働が無ければ何にもならぬ．土人が使はれぬやうなら植民地などは無いも同然だと考え又論じて居るのである．（略）（前出「国際労働問題の一面」[2]）

(20) 此種の労働者を雇入れる方法は（略）通例は酋長の部落民に対する権力を，不断からよく保護して置いて，間接に之を利用するのである．酋長は元は生殺の全権までも持って居た

1) 『定本柳田国男集：第25巻』pp. 96-97.
2) 『定本柳田国男集：第29巻』p. 129

ものがある．彼の言ふ事ならば，余程のいやな事でも土人は聴く．つまり怖しいからである．（略）人口がよい程に分布し，農場付近の部落から，通って働き得るやうな場合は問題にならぬ．（略）併し普通は農場は大きな空地を占め，寧ろ従来土人に使用せられなかった方面を選定する故に，そこらの人手では用に足らず，従って出稼と云ふ問題が起るが，是を皆此方法で徴募して居たらしいのである．地理を知らぬほどの人々には，部落を離れると云ふことは，我々の想像以上の大事件である．勿論路がわかれば大抵遁げて戻る[1]．そこで簡便なる足留策として別の島へ送ることにする．ニウギニヤの委任領，即ちもと独逸でビスマルク群島と称へた地方なども，此方法が大に行はれた．其為に元の部落には女の数が剰り，尚其他の原因も加はって，結婚をせぬ者，しても子を生まぬ者が多く，著るしく人口が減少してしまった．**濠洲**が其委任統治に当ることになってから，頻りに其弊害を指摘して居るが，然らば御自分たちは断然此方法を行はぬつもりかと云ふと，酋長懐柔策の弊を誓戒し，募集人を取締る上に，あまり遠方の島へは出稼をさせぬ方針だと謂ふ迄である．（略）

英領の南太平洋では，ソロモン群島バンクス諸島辺に住むメラネシヤ人が，一番よく引出されるやうである．是は第一人口が多いのと，少しは出稼心が有って，付近の島の地理にも通じ，外へ出ることを命を取られる程には怖がらないで，元は**オウストラリヤの大陸**にも往って，若干の成績を示したのであるが，所謂**白色濠洲主義**を主張する彼地の労働党が八釜しいので，追々に又之を送り返し，今では土人徴募の方針を中止した．多くの白人と共棲して働く地方ならば，彼等の境遇を感化に由って改良するからと云ふ口実も立つが，実際に於ては熱帯の白人もあまり行かぬ処の方が必要も多く，白い労働者の居る区域では，排斥があって事業家の計画を妨げるから行はれないのである．

赤道のすぐ南，南緯零度二七分の辺にナウルと謂ふ一小孤島がある．以前は独領で，……引離されて英国の委任統治に属して居る．非常に豊富な燐砿の産地で，（略）是に土人が千人ほど居るが，働く必要を感ぜぬので，今は少しも働かない……．何でも独逸時代には右申す土人徴募方法で，……連れて行って働かせたものらしいが，……国際関係がうるさいものだから之を中止し，受任国では非常な遠方のニウギニヤ領の島から，特に或数の土人を徴募して行くことを許したと言って居る．此土人たちが文明国の貧民と同じく，……金の為に出て来るので無い限り，此の如く渋々来る者を天涯万里の地から運搬するといふことは，八釜しく論ずるならば是も亦強制の労働で，奴隷制を罪悪なりと説いた手前から言って，之を黙認して居る顔であるが，而も各国の経済政策は，此の如き植民地経営の法を必要とするので，かの人種の異同差別の如きは，寧ろ之を顧みては居ないのである．

それよりも更に思ひ切って居るのは，愈々太平洋の土人が安楽を愛して欲を知らず，豊富

1）実例として，クロード・レヴイ＝ストロース『民族学者の責任』に於けるナンビクワラ族の場合の報告を参照されたい．（大橋保夫編『構造・神話・労働』1979年4月，みすず書房刊所収，p. 16.）

なる弘い土地を棄てゝ利用せず，而も一方色々の故障の為に，急に土人の人口も増加する見込が無いと見るや，其開発の為には遠くから人を喚んで，前年米国の企業家等が布哇で試して，評判の悪かった契約移民の方法をも繰返して居るのである．例へばフィジーへは，もう久しい前から印度労働者の数千が入れられて居る．サモアには新に香港政庁の世話で女房をつれない数百の支那苦力が来て居る．ナウルの燐砿島へも同じく支那人をつれて来た．（略）つまり植民地の原住民の数が多からず，又無理に之を使役しようとすれば世間が八釜しいとすれば，資本家はそれで事業を止めようとはせずに，何とか理窟をつけて，排斥するのが普通の亜細亜人を迄も喚ぶのである．かの**白色濠洲の主義**の如きは，謂はゞ資本家側の本心では無いので，我々の移民事業の障碍は，此方面に何も無いのである．（同上）[1]

柳田国男が心痛めるわが国地方農村の疲弊と変質の過程は，第一次世界大戦後の国内経済の反動恐慌の下でいっそう悲劇的に進行しつつあった．そうしたプロセスの社会的動因となった日本経済近代化の政策については，柳田は柳田なりの批判を加えていたことはたしかである．しかしながら，柳田その人は，気質的にも思想的にも，体制変革を叫ぶ革命家ではなかった．むしろ実務官僚としての堅実なキャリアがものがたるように，すぐれて現実的な立場から問題に対処するタイプの指導者であったといえよう．

すなわち，明治期以後，近代経済のドラマティックな変動にさらされてしばしば行詰まった農村から余剰となった労働力がいわゆる海外出稼ぎの移民として大量に流出し，移住先国でそれなりの成果を挙げてきた事実をふまえて，柳田は，これらの余剰労働力を国の政策のもとに計画的に，熱帯・亜熱帯の労働に不適合な白人労働力または非人道的な強制による非効率的な原住民労働力に代えて，それらの未開拓地，開発途上地に投入するという構想を抱くに至ったものと思われる．これを以て，日本国内植民地たる疲弊した農村の問題，そして西欧列強の悩みである海外植民地の経営の問題を同時に，漸進的に解決できる現実性のある方策と考え，それを柳田は国際労働力移動の問題として位置づけたのであった．たしかに，こういう施策は，内外どちらの矛盾をも温存，隠ぺいすることになるという批判にさらされることであろう．しかしながら早急に根本的な同時解決の目途が立たないからといって拱手坐視しているよりも，何かを実行する方がわずかでも社会の前進につながるのではあるまいか——これが，柳田国男の所信であったといえよう．

そういう柳田の政策的観点からすれば，北アメリカの日本移民排斥運動やオーストラリアの白濠主義などという非理性的なナショナリズムの障壁によって，双方に重大な意味を帯びる当面の国際労働問題が解決されぬままになっているのは，ゆゆしきことであった．大正10年代に入って，この問題についての柳田国男の発言がとみに高まるのは，まさにそういう非理性的な

1) 『定本柳田国男集：第29巻』pp. 132-134.

国際政治の現実に触発されての一種の警世の声としての意味をもっていたのである．はじめに示したとおり，柳田の遺した尨大な著作の中で，さして多からぬオーストラリア関係の事項への言及のうち，白濠主義への批判的な発言が比較的多く，しかもこの時期にそれが集中しているのも，当然のことといわねばならない．

(21)　（略）布哇の移民事業の如きも，公平な眼で見て，慥かに日米両国に取って，失敗の大なるものであった．布哇の開発の為に，大に日本人を入れて見ようと企てたのは，まだ米国の領土にならぬ時代であったが，やはり米国の事業家であった．若し之を考え付かなかったならば，或は又其当時，今の**白色濠洲主義**の如き狭隘なる反対運動をするほどに，布哇の在米労働者の団結が強かったら，而して又布哇を米国に併合した結果，米国との間の国境がとれてしまって，一時この在布哇の日本出稼人が，どやどやとカリフォルニヤに渡って行かなかったならば，所謂同化非同化の問題を，特に日本人に限って八釜しく言ふ必要も起らず，又其後若干の用意して，相当の決心を以て米国に渡った若き日本人たちに，此の如き大なる煩累を及ぼすことが無かったらうと思ふ．（同上）[1]

(22)　（略）此国とは我々日本人は，近年何度も不愉快なる感情衝突をした．彼の新たに採用した移民政策は確かに無理なものであった．併し考へて見ると，今更此様な無理を敢てしなければならぬ程，従来の態度はまだ応揚であったのである．其隣国のカナダの如きは，最も早くから日本を警戒し，又南阿弗利加共和国でも，**濠洲やニウジーランド**でも，何れも最初から最近の北米がやったやうな事を，我々に対して遣り続けて居たのである．米国が遅蒔きに此等の因業なる白人国を模倣する迄には，日本国民の悪感や報復に対する懸念とは独立して，米国彼自身も亦大に煩悶したのである．煩悶すべき理由が十分にあったのである．米国が独立以来の一世紀の間に，国内に入れてしまった異民族の，最多数を占めて居るのは黒人である．その以外にも少数の亜細亜人，又東欧羅巴の気持ちのちがった白人があって，此等はまだ融合して一体の国民とはなって居らぬ．即ち彼に在っては人種問題は国際の問題に非ずして，眼前の国内問題である．（略）

それから今一つの米国の特殊事情は，太平洋諸島に対する地理上の関係から来て居る．貿易上又国防上，太平洋の交通は彼に取って一番大切であるにも拘らず，おくれて世界に出て来た為に，米国の属地といふものが此方面に於ては甚だ少ない．……赤道以南に行くと僅かにサモアの東二島を持つだけである．サモアは大きな島が四つあるのを，今から四十何年前に独逸が西の二島を押取りした際，大急ぎで米国も残りの二つを手に入れた．（略）其後太平洋岸の繁栄は愈々加はり，**濠洲との交通**も密接になって来たから，追々にはサモアも布哇以上の重要さを持つかも知れぬが，現在に於ては僅かばかり英領の間に介在して居るので，

1)　『定本柳田国男集：第29巻』p. 118.

却って管理が厄介な位で，まだ是ぞといふ経営も試みては居ないのである．

実際又欧羅巴の旧国のやうに，植民地経営をする必要は米国には無いのであった．（略）（前出「青年と学問」[1]）

(23) 北米合衆国の一例を取って見ても，所謂亜細亜移民の問題には百年間の歴史があります．移民の出て行く支那印度等の本国では，国としては殆と無意識に，溢れてこぼれて流れて行ったと云ふ迄ですが，之を受取った国の方では，それが悉く当局及び利害関係者の，忘るゝ能はざる実験でありました．最初は躊躇して必しも移住を喜ばなかった支那クーリーを，西部地方の新事業の為に，すかし勧めて連れて行った時代がある．今居る支那人の多くは其子孫でせう．それが或年月の後に非常に厭はしくなって，実にひどい手段を以て支那移民を打切り締出しを食はせ，日本人だけは来ても宜しいなどゝ言って居ました．それが今度はさう遣って来られてはたまらぬと言ふ程になり，あちらの人種との利害感情の衝突が段々繁く，終には何でもかんでも日本人は之を駆逐し且つ国内から全滅させたくなったのであります．人間で言ふと金持の子供などによくある気の儘で，初は来い〳〵と喚びに来り，後にはもう還れと言ってわめくやうなものであります．（略）

それでも米国は其気の儘が，まだ十分に通らぬ所も有り，少くとも通すには手数が掛るので，あれでもやはり隣国の加奈陀や**濠洲**や，南亜共和国などを淡んで居るのです．それほど又我々亜細亜人は，此等の国に於ては夙に且つ最も鮮かに排斥せられて居るのであります．而も日本人は，決してあきらめの悪い国民とは言はれませぬ．所謂**白濠洲主義**の論客などは，気の強いばかりか意地も悪い．単にまあ早く縁を切って置いてよかったと悦ぶだけで無く，毎年一定の期節になると，定期風の如く悪口を電報で打って来る．之をしも聞流して我々は，二十何年の間仲よく日英同盟を続け，大戦中は太平洋上の運送船までを介抱してやりました．（講演草稿「準備なき外交」[2]）

むすびにかえて

柳田国男は，その長い生涯の間にオーストラリアの地を踏んだことがない．つまり，柳田におけるオーストラリア認識は，文献・情報資料から得た間接的体験によってのみ構築されている．それだけに，彼の場合それは質・量ともに把握・整理しやすかったともいえる．

本稿でこれまで筆者が検討してきたように，柳田国男にとってオーストラリアとは，二重のイメージから成り立っている．そのひとつは，もっぱら文化人類学的調査研究の対象としてのアボリジニーの世界であり，いまひとつは，主として20世紀に入っての国際政治の緊張の中で

1) 『定本柳田国男集：第25巻』pp. 94-96.
2) 『定本柳田国男集：第29巻』pp. 487-488.

日本人労働力受入れを拒否する未開拓の大地である.

しかも，このふたつのイメージは，近代植民地経営という帝国主義段階における世界資本主義の営為を通じて結びついているとともに，視座を移せば，外を照らして内を省みる日本民俗学の建設と，国際労働力移動という現実的課題との取組みというふたつの仕事に挺身しつつあった柳田国男その人の生きざまにおいて，みごとに斉合していたといえるのではあるまいか.

(1980. 9. 30)